

【研究ノート】

青陵自画賛訳注稿

坂本頼之

はじめに

本稿は江戸時代の漢学者海保青陵（名は皐鶴、青陵は号）（1755～1813）の残した三幅の自画賛の訳注を試みたものである。海保青陵は特異な経世家として扱われることが多く、先行研究も経済・政治思想面のものが多い。その一方で、青陵の思想には「二心論」とも言うべき心性論が含まれていることは従来看過されがちであった（注1）。その心性論の内容を多分に含みながら、従来の研究において、殆ど触れられることがなかったものが、青陵が自ら描いた三幅の画と賛である。

青陵の心性論は、その著作の中に散見される。特にまとまった内容を持つものが『天王談』と『洪範談』、そして『老子国字解』である。『天王談』『老子国字解』において青陵は、己が「心」を二つに分け、一方を「将帥心」一方を「士卒心」として、「将帥心」による「士卒心」の制御を説き、また『洪範談』では「心」「静」と「気」「動」との対比から心の機能を説き、併せて「士卒心」「将帥心」の関係を用いた「心」の制御を説いている（注2）。

青陵自画賛は「文殊」「観音」「普賢」の三つからなるが、そのうち「文殊」に述べられた内容は『天王談』と関連した「心」の制御の段階と方法を述べたものであり、「観音」に述べられた内容は『洪範談』と関連した「心」による「気」の制御を述べたものである。また「文殊」「観音」ともに『老子国字解』とも関連した内容をもつ。「普賢」は「観音」とも重なり、ある老人が青陵から不動経を聞いて、「心」の制御に気づくことが述べられている。この様に自画賛は、多数の著作にまたがる青陵の心性論を結ぶものとも言うべき文であり、青陵の心性論を研究する上で重要な資料であるが、管見の及ぶ限りで全訳が試みられたことはなく、よって本稿で訳注を試みた次第である。

青陵の自画賛は谷村一太郎編『青陵遺編集』（國本出版社 昭和10年7月）

青陵自画賛訳注稿（坂本）

（以下『遺編集』と記述）に収められており、その来歴は、青陵が訪れ講演した越中高岡の伊東家に襲蔵されていたものである（注3）。『遺編集』には巻頭に三幅の画の写真画像「文殊観音普賢繪像並ニ賛」が収められ、また谷村氏によって文字におこされ、句読点・返り点がうたれた青陵の自賛が「青陵雑纂」中に収められている。本稿ではこれを底本として用いた。また青陵の語句の解釈は独特のものが多いため、訳注にあたっては青陵の著作を参考に解釈することに務めたが、その際引用した青陵の著作は、蔵並省自編『海保青陵全集』（八千代出版 昭和51年）（以下『全集』）を用い、その際には引用箇所を『全集』の頁数で附した。また『全集』に収められた青陵の著作は、漢字仮名交じり文であるが、便宜上本稿では筆者により漢字とひらがなに戻してある。また引用された各経典を参照する際には『十三経注疏附校勘記』（中文出版社 1979年）を用いた。

- (注1) 青陵の二心論については拙稿「海保青陵の二心論」（『白山中国学』第15号 2009年1月）で詳細な考察を行っている。先行研究では小林武「海保青陵『老子国字解』について（下）一智と職分一」（『京都産業大学日本文化研究所紀要』第五号 平成12年3月）に、『洪範談』および『老子国字解』に用いられている二心論について言及があるが、小林氏は青陵の二心論について、「「将帥心」と「士卒心」は「智」を湧かす仕方の説明概念である」として、日常的な「智の湧く法」の説明として用いられたものと見ている。また小林氏の論中に青陵自画「普賢」賛と『天王談』の関連について触れ、一部を訳した部分（p.180 また注(24)）があるが、そこでも小林氏は「「智」の方法を説いている」「「智」の修行を形象化したものだ」としている。
- (注2) 青陵の心性論が述べられたものとして、例えば『天王談』の前半部分（『全集』p.497～501）、『老子国字解』冒頭（『全集』p.800～802）の部分、『洪範談』上（『全集』p.611～614）の部分など。勿論これだけに留まらないが、比較的まとまった部分を例としてあげた。
- (注3) 『遺編集』の「老子国字解・綱目駁談・青陵雑纂序説」（p.3）において、谷村氏は『遺編集』に収めた青陵著作の底本について、その詳しい来歴を述べている。自画賛の来歴についてもそれを参照した。

一、文殊

文殊

古之學者。必左右圖書。蓋書之所不能盡則圖焉。圖之所不能寫則書焉。取此以授之。因此以受之。所以詳悉無不究也。印度之學陳其意於書。而寓其像於圖。故習熟甚專而譬諭甚切。所謂佛菩薩天王即積智之階級。乃自其易爲者漸々馴致其難修者。故始於剛。中於柔。而後成於空矣。所謂象獅子魔卒即傲驕貪慾之輕重。亦自其易制御者。漸々馴致其難降伏者。故始於怯懼。中於巨猛。而後成於無形矣。書云道心惟微。人心惟危。孟子云志者氣之帥也。氣者體之充也。道心云志云者猶佛菩薩天王也。人心云氣云者猶象獅子魔卒也。故吾喜古聖人之書與印度之圖。甚懼後世之無所爲而誤排擊佛氏之徒。海保皋鶴並謹題

訓読

古の學者は必ず圖と書を左右にす。蓋し書の盡くす能わざる所は則ち焉を圖き、圖の写す能わざる所は則ち焉を書し、此れに取りて以て之に授け、此れに因りて以て之を受く。詳悉して究めざる無き所以なり。印度の學は其の意を書に陳べて、其の像を圖に寓す。故に習熟甚だ専らにして、譬諭甚だ切なり。所謂佛菩薩天王は即ち積智の階級なり。乃ち其の爲し易き者より漸々として其の修し難き者に馴致す。故に剛より始まり、柔を中とし、而して後空に成る。所謂象獅子魔卒は即ち傲驕貪慾の輕重なり。亦其の制御し易き者より漸々として其の降伏し難き者に馴致す。故に怯懼より始まり、巨猛を中とし、而して後無形に成る。書に云ふ道心は惟れ微かなるものなり。人心は惟れ危うきものなりと。孟子に云ふ志は氣の帥なり。氣は體の充なり。と。道心と云ひ志と云ふは猶ほ佛菩薩天王のごときなり。人心と云ひ氣と云ふは猶ほ象獅子魔卒のごときなり。故に吾は古の聖人の書の印度の圖に與みするを喜び、甚だ後世の爲す所無くして、誤りて佛氏の徒を排擊するを憎む。海保皋鶴並びに謹みて題す

現代語訳

いにしへの（理想の時代の）学者と呼べるような人は（注1）、必ず図と書を左右の身側に置いていた。思うに、書きつくせない点を絵図に描いて示し、絵図で描ききれない点を書物に述べ（ることで補完し）、（教えを伝える者は）補完されたところから取り出して教えを授け、（教えを受ける者は）補完されたところから教えを受け取ったのである（注2）。（これこそ）事細かに知り尽くして、詳しく探求しつくさないものが無くなるというやり方である。印度の学ではその（天理である）意を書物に述べ（注3）、その（手本とすべき）姿を絵図にこと寄せている。そのため（その教えに）習熟することが、とても一途であり、また喩えがとても身近で密接である（書物だけの場合よりも理解しやすい）（注4）。いわゆる仏・菩薩・天王というものは、つまり知恵を磨く方法の段階（を示したもの）であり（注5）、そして行いやすいものから、段々となしがたいものへと次第に慣れ親しむ様子でもある。まず「剛」（たる天王の段階）から始まり、「柔」（たる菩薩の段階）を中程とし、そして最後に「空」（たる仏の段階）（注6）に至って完成される。いわゆる象・獅子・魔卒は、驕り高ぶり、貪欲にふるまう心の大事と小事とであり（注7）、これもまた制御しやすいものから、段々と制御しにくいものへと次第に慣れ親しむ様子でもある。恐れ怖じける心から始まり（注8）、猛獣のように巨大で猛々しく自由にならぬものを中ほどとし（注9）、最後は無形（の自らの心）の制御に至って完成される（注10）。『書経』に「道心は惟れ微かなるものなり。人心は惟れ危きものなり。」とある。『孟子』には「志は気の師なり。気は体の充なり。」とある（注11）。（『書経』で）道心といい、（『孟子』で）志というのは、（印度の学でいう）仏・菩薩・天王のことであり、人心といい、気というのは、（印度の学でいう）象・獅子・魔卒のことである（注12）。だから私は中国の古の聖人の書物と、印度の絵図とが指し示すものが同じであることを喜び、後世の学者たちがこのことに気づくことなく、誤って仏教を学ぶものを攻撃し排斥したことを憎むのである。海保皋鶴並びに謹みて題す

（注1） 『洪範談』洪範談小引に「堯・舜・禹・湯・文・武は天意を受けて学びたる人なれば、やはり学者なり」（『全集』p.584）とある。青陵は「天

青陵自画賛訳注稿（坂本）

意」を学ぶ学者と、文章を読み、注釈をつけるだけに成り下がった後世の儒者（『洪範談』p.616「後世の儒者には～」）を区別することが多い。ここも「天意」を学ぶ学者と解釈した。

(注2) 本文「取此以授之。因此以受之」の「此」は、図と書が尽くせない部分を相互に補完することを指し、その結果、教えを伝授する際に授ける側と受ける側双方にとって、「所以詳悉無不究」となることを述べていると解釈した。

(注3) 「孟子の意は天理なり。孔子の意は天理なり」（『養心談』p.420）とあるように、「意」とは、文字や言葉ではなく、そこにこめられた「天理」のことである。またここでいう「印度の学」の「意」とは、青陵が孟子や孔子から読み取ったように「印度の学」から読み取った「意」＝「天理」のことであり、一般的な仏教哲学における「意」とは異なる。青陵が読み取った「印度の学」の「天理」の例として、『老子国字解』（p.866）には事物を分ける「理」として釈尊の四大種があげられている。青陵はこの四大種について、老子の四大「天地人道」、西洋の四元行と並べて、「およそ智者聖人は理につきてきわむるゆへに、天竺もからもえろつばも同じ事也」（『老子国字解』p.866）として、釈尊の「理」と老子の「理」とが一致することを述べている。また青陵の「天理」とは「さなければならぬすぢ」（『洪範談』p.633）とされる、いわば「必然性の法則」（小島康敬「海保青陵—その思惟構造—」（相良亨・松本三之介・源了圓編『江戸の思想家達（下）』（研究社出版 1979年 11月）に所収）より）のことを指す。青陵の「理」「天理」については小島氏の研究に詳しい。

(注4) 「譬論甚切」は『天王談』の「書経の言より見れば、天王の木像は又ずつと巧なる事にて、合点もゆきやすきなり。天王少も油断をすれば、じきに外道むつと首をあげて出たがる様子を写したる処極々親切なり」（『全集』p.499）を参考に解した。

(注5) 『天王談』（『全集』p.498）に「此木像はみな知恵を磨く仕方を形にあらわし玉ふ」とあることから解した。また仏・菩薩・天王とは心を制御するための修行の段階を指す。この修行の順および方法は『天王談』冒頭（p.497～500）において詳細に述べられている。ここでは『天王談』に従い解釈し、また順序も『天王談』の順に従った。『天王談』の各修行について、詳しくは前述の拙稿「海保青陵の二心論」を参照していた

だきたい。

- (注6) 「剛」「柔」「空」は、いずれも制御の方法の段階を示し、『天王談』（『全集』p. 498～500）に詳細が述べられている。「剛」「柔」については、前述の拙稿「海保青陵の二心論」に詳細に論じたので、そちらを参照していただきたい。また「空」とは『天王談』（『全集』p. 500）によれば「剛」「柔」の修行後、「此修行成就すれば、又如来を修行する事なり」とある、如来修行によって会得される制御の方法である。この如来とは雲中より自らを見下ろす心の形象であるが、その雲中より自らを見下ろす様を「空」として解釈した。この「空」の観点は、青陵がたびたび説く「空位」へと繋がる。青陵の「空位」については前述の小島氏の研究に詳しい。
- (注7) 本文「象獅子魔卒」は制御される対象の難易度を表したものである。『天王談』には「文殊は獅子に腰をかけ玉ひ」「普賢は象に騎玉ひ」「四天王各執物を持ちて、外道の魔卒を踏みて立玉ふ」（『天王談』p. 497）と、それぞれ制御される対象であることが述べられている。ただしその順については、『天王談』では天王修行＞菩薩修行＞如来修行の順で修行の段階が示され、それぞれの修行で制御されるものとして、魔卒＞獅子＞己れの心がそれぞれあげられており、「文殊」の「象獅子魔卒」の順とは異なる。ただし「文殊」の「剛」「柔」「空」の順は『天王談』にあげられた修行の順と一致する。「文殊」では「剛」「柔」「空」と「象」「獅子」「魔卒」、「怯懦」「巨猛」「無形」がそれぞれあげられているが、青陵の各著作の二心論の説明から考える限り、「象」と「獅子」は同一の段階であって「柔」「巨猛」と対応するものであり、「空」「無形」に対応すべき「己れが心」（『天王談』p. 500）が「文殊」には無い。これは「自画賛」の画（「文殊」は獅子にのった文殊菩薩画像であり、「普賢」は象にのった普賢菩薩画像）と対応させたためとも考えられるが不明である。
- (注8) 「怯懦」とは『養心談』（『全集』p. 409）に「己が心を己が制する故、何ぞへ取付かねば制する事ならぬなり。（中略）取付処なければ心あやぶみて慥かならず。故に怯懦になりて畏懼する也」とあるように、我が心を自ら制する最初の段階において、制御のための持つべき拠り所を持っていないために陥る、不安で怯える心の状態のことである。
- (注9) 「巨猛」は『天王談』（『全集』p. 500）に「猛なる心の形容をば獅子

青陵自画賛訳注稿（坂本）

に作り、大にて自由にならぬ形容をば象に作りたるなり」とあるのを参考に解した。

- (注10) 青陵は『老子国字解』「大象無形」の解釈において、「無形」とは、対象を自らの中に取り込むことによって無形となるとみている。例えば天が大象であることの説明として、「此世界をつつみておる天の形は人にはしれぬ也。それ天の中に人々入りておるゆえ也」（『老子国字解』p. 901）と天が世界を包んでいるため、内包された人間には天が見えないためであるとす。 「文殊」で青陵が述べる「無形」とは、制御の最も難しいものの形容であり、またそれを「空」に身を置くことで制御することを述べていることから、「文殊」でいう「無形」とは、己が身から己を見ることが出来ないこと、つまり「己」という対象に「己」が包み込まれてしまっている状態を指すと考えた。『天王談』（p. 500）にも「己れが心には己れが見にくき」として、「己れが心」を制御することを、心の制御の最終段階としている。この状態を制御する「空」については「文殊」（注6）を参照していただきたい。

- (注11) この部分の『書経』『孟子』の読みは『天王談』に引用されている青陵自身の読みに従った（『全集』p. 499）。引用元は『書経』大禹謨「人心惟危。道心惟微（人心は惟れ危うし。道心は惟れ微かなり）」と『孟子』公孫丑上篇「夫志氣之帥也。氣體之充也（夫れ志は気の帥なり。気は体の充なり）」である。

- (注12) 道心・志・仏・菩薩・天王と、人心・気・象・獅子・魔卒の関係については、『天王談』の前半部分（『全集』p. 497～500）に述べられている。例えば「書経には道心は微かなるものなり。人心は危きものなりと云へり。此心を二つに分けて大願を思ひ込る実なる心を道心と名づけたり。大願の邪魔をする心を人心と名づけたり」（『全集』p. 499）とある。このように道心とは大願の心であり、いわば「本心」であるとされ、人心とはそれに対する「欲心」とであるとされている。仏菩薩天王はみな道心の象徴であり、象獅子魔卒はみな人心の象徴であると青陵は見ているのである。青陵の心性論は、この道心による人心の制御が基本の考え方となっている。詳しくは前述の拙稿「海保青陵の二心論」を参照していただきたい。

二、観音

観音

喜怒哀樂之未發謂之中也。則心未動之時、衆民與聖人異者幾希矣。發而皆中節謂之和也。則聖人之喜怒哀樂。其中心未嘗不靜焉。特使氣暫為喜為怒乎。哀樂而已。故得使不甚過也。老子曰心使氣曰強信矣哉。心者氣之君也。惟一惟靜、貴矣重矣。無時而不在也。氣者心之臣也。卑矣。輕矣。甚多。甚躁。時而現。時而藏。孟子曰。志者氣之帥也。氣者體之充也。其不信矣乎哉。如衆人則心與氣始無分別焉。氣動則心從而遷。是君却制於臣也。不亦過乎。不動明王使心不得動之圖也。觀音菩薩心自然不動之圖也。既修明王而後修菩薩亦升高必自卑之意。古人云坐狹之人、精神須帶半睡。吾喜印度之教與聖賢之言符焉。海保皋鶴並謹題

訓読

喜怒哀樂の未だ發せざる之を中と謂ふなり。則ち心未だ動かざるの時、衆民と聖人の異なる者は幾んど希なり。發して皆節に中る之を和と謂ふなり。則ち聖人の喜怒哀樂、其の中心未だ嘗て靜ならずんばあらず。特だ氣をして暫りに喜為らしめ怒為らしめ、哀樂せしむるのみ。故に甚だしくは過ぎざらしむるを得るなり。老子曰く心氣を使ふを強と曰ふと。信なるかな。心は氣の君なり。惟れ一惟れ靜、貴し重し。時として在らざる無きなり。氣は心の臣なり。卑し輕し。甚だ多、甚だ躁。時として現れ、時として藏る。孟子曰く、志は氣の帥なり、氣は體の充なりと。其れ信ぜざらんや。衆人の如きは則ち心と氣とは始め分別無し。氣動けば則ち心從いて遷る。是れ君却つて臣に制せらるるなり。亦た過ちならずや。不動明王は心をして動くを得ざらしむるの圖なり。觀音菩薩は心自然と動かざるの図なり。既に明王を修めて後菩薩を修むるも亦た高きに升るには必ず卑きよりするの意なり。古人云う狹に坐するの人は精神須く半睡を帶ぶべしと。吾印度の教と聖賢の言と符するを喜ぶ。海保皋鶴並びに謹みて題す

現代語訳

喜怒哀楽の感情が、まだ「心」に発していない、これを「中」という（注1）。そこで「心」がまだ（感情に引っ張られて）動いていない時は、民衆と聖人とで異なるところは殆どないのである（注2）。（感情が）発してそれぞれがほどよくゆく、これを「和」という（注3）。そこで聖人の喜怒哀楽の感情を発する様子といえば、その「心」は「静」の状態ではなかったものはないのである（注4）。ただ「気」に仮に喜怒哀楽させるだけのことなのであり、だから過度に（喜怒哀楽の感情によって「心」を）動かさせないようにすることが出来るのである（注5）。『老子』に「心が気を使うを強と曰う」（注6）といっているのは、本当のことであるなあ。「心」は「気」の君である（注7）。「一」であり、「静」であって（注8）、貴く重要なものであり、常に存在しているものである。「気」は「心」の臣である。卑しく軽いものであり、「心」が「一」であることと比べて）大変雑多で、また（「心」が「静」であることと比べて）大変軽々しい（注9）。また（「心」が常に存在していることと比べて）時に現れ、時にかくれるものである。『孟子』に「志は気の師なり。気は体の充なり。」とあるが、それは間違いなく本当のことである（注10）。（一方で）民衆たちは始めから「心」と「気」との区分がない。「気」が動く「心」がそれに従って移り変わってしまう（注11）。これは君が臣下に制御されてしまっていることである。大変な間違いではないか。不動明王（の絵図）は「心」を動けないようにしている絵図である。観音菩薩（の絵図）は「心」がそのまま動かない絵図である（注12）。明王の（修行の）段階を修めてから、後に菩薩の（修行の）段階を修めるということも、これもまた（『中庸』と同じように）高い段階に登るには、低い段階から始めるという意味を指し示している（注13）。古の人は「敷物に座るような（貴い）人は、半分眠ったような様子で（心を静めている）のが当然である」といっている（注14）。私は印度の教えと聖賢の言葉とが符合することを喜ぶ。海保皋鶴並びに謹みて題す

（注1） 原文は『中庸』「喜怒哀楽之未発謂之中（喜怒哀楽の未だ発せざる之を中と謂ふ）」からの引用である。青陵は「喜怒のまだ心中に発せぬを中

といふといへり。これは心の字の解なり。心には喜怒はなきなり。静なるを心といふ。動くを氣といふなり」（『洪範談』 p. 613）と、喜怒哀楽の未発と已発について「心」と「氣」で解釈している。青陵の「心」と「氣」については拙稿「海保青陵の二心論」で論じたが、簡単にここでも触れると、「氣」は「心」の軽いものであって、全ての物は「氣」を持つとされる（「天地間の物は皆形あり。形あるものは皆氣あり」（『洪範談』 p. 611）。「氣」とは「いきておるゆえんのものを指していふ字」（同上）であるが、それは人の体で言えば「心」となる（同上）。そしてまた「心」とは「思惟して考へるもの名なり」（同上）とされる。また青陵のいう「中」とは、「古への中といふは、過・不及のない至極の上々のことなり」（『洪範談』 p. 669）とされる過不及のない状態のことであるが、それは「天の理は過不及なし、まん中也」（『老子国字解』 p. 814）とあるように「天理」でもある。青陵は天より下された「心」を「直心」「本心」として、「天より下されたるままの心はよき心なり。人々天より下されたる心あり。され共人心にくらまされて、彼天授の直心うすらぎてあしふなるなり」（『洪範談』 p. 647）とするが、この「心」はまた「天理にかなひたる心の事なり」（同上）とされる。この天与の「本心」が「人心（氣）」にくらまされておらず、「天理」にかなった過不及のない状態であることが、つまり「中」である。

(注2) この「聖人」とは「聖人の氣をつかふは又上手なり。心が氣をつかふなり」（『洪範談』 p. 613）とされ、また「天の理を得て身に行う人を云ふ也。知患者といふ処へ聖人と用ゆる也」（『老子国字解』「是以聖人処無為之事」 p. 808）とされる聖人を指す。ここで青陵が、聖人と民衆との違いはほとんどないと言うのは、聖人とは「心」で「氣」を使うことの上手な人のことであるため、「心」が「氣」によって左右されないため常に「静」の状態を保てる。一方民衆も喜怒哀楽の感情がまだ発していない時点では、「心」は「静」の状態である。そのため、その時に限っては聖人と一般民衆とに大きな違いはないという意味である。

(注3) 『中庸』「發而皆中節謂之和（發して皆節に中る之を和と謂ふ）」の引用である。青陵は「発して節にあたるを和といふといへり。和は塩梅よく入れあふて、吸物あんばいの醤油と水と一つになりて、じゅんじゅくしたる事なり。喜怒すべきときに、喜怒すべきほどに喜怒して、ほどよふゆくといふ事なり」（『洪範談』 p. 613）と解釈している。ここでも

それに従い解釈した。

- (注4) 「中心」は「心には喜怒はなきなり。静なるを心といふ」（『洪範談』p. 613）の「心」と同じであると考え解釈した。また「静」とは「心」が喜怒の感情に揺さぶられない様子を指している。『老子国字解』「心善淵」に「淵は水のわくところ也。水の湧処ほど静なるものなき也。（中略）喜怒哀楽は心の動き也。心動けば迷ふ也。心が心のおりどころに居れば、決して迷ふ事なし」（『全集』p. 826～827 中略は筆者による）とある。青陵には「静は動かぬ也。静が物の正体にて、動はかりそめのこと也。人も動かずに居が、正体にて動くはその時のかりそめ也。心などは猶以ての事にて、動けば本がかりそめ事なれば、真実の工夫は出ぬ也」（『老子国字解』「致虚極守静篤万物并作」p. 845～846）という「静」を物の本質として重んずる考え方がある。
- (注5) 『洪範談』で「喜怒すべきときに、喜怒すべきほどに喜怒して、ほどよふゆくといふ事なり。これ心では喜怒せずに、気をつかひて心が気にかかりそめに喜怒さするなり。これは己れが気を己れが心でつかふ法なり」（『全集』p. 613）と述べるのに従い解釈した。「暫」は『洪範談』で青陵が「かりそめに」としていることから「仮に」と解釈した。
- (注6) 『老子』第五十五章「心使氣曰強」（『老子国字解』p. 922）。青陵の『老子国字解』の解釈では、「心は將帥心也。氣は士卒心也」とされている。この「將帥心」「士卒心」について詳しくは、「はじめに」（注1）に前述の小林武「海保青陵『老子国字解』について（下）一智と職分一」、および拙稿「海保青陵の二心論」を参照のこと。また『老子国字解』では「心に慾なし。ゆへに迷惑はぬ也」として「強」とは「迷惑はぬ」ことであるとされるが、「文殊」における「怯懼」が「文殊」（注8）で示したように、持つべき拠り所を持っていないがために陥る不安で怯える段階のことであるから、この「強」はその段階を制御する「剛」と通じるものであると思われる。
- (注7) 『洪範談』に「心の中でいへば、將帥心は一心の君なり。士卒心は一心の臣下なり」（『全集』p. 633）と述べられるように、心を二つに分けたとき「將帥心」と「士卒心」とに分けられるが、そのうちの制御を行う側の「將帥心」が「心」であり「君」、「士卒心」が「氣」であり「臣下」となる。これら「將帥心」「士卒心」の関係については『洪範談』（p. 613）にも詳細に論じられている。詳しくは前述の拙稿「海保青陵

青陵自画賛訳注稿（坂本）

の二心論」を参照していただきたい。また董仲舒の『春秋繁露』循天之道七十七に「凡氣従心。心氣之君也（凡そ氣は心に従ふ。心は氣の君なり）」とあるが、青陵の思想との関連は不明である。次稿の課題としたい。

- (注8) 二心論を扱う文献、『書経』大禹謨や朱子『中庸章句序』などには良く似た表現「惟精惟一」が見られ、この「惟一惟静」とは順番と「精」「静」の違いがある。青陵は「心には喜怒はなきなり。静なるを心といふ」（『洪範談』p. 613）と述べており、また次の（注9）でも触れるが「静」と「躁」を対で表現しているため、明らかな意図を持って「静」の字を用いていると思われる。ここで順番が入れ替わっているのはともかく、「精」と「静」が異なることは、青陵の心性論の特徴を知る上で大きな意味を持つと思われるが、詳細な検討については次稿の課題としたい。「一」は「然れば人の心にとりてみれば、将帥心は一つなるべし」（『洪範談』p. 674）とあるように、道心たる「将帥心」が一身の主人であり唯一のものであることの形容である。それに対して人心たる「士卒心」は「三四百の士卒心を唯一の将帥心があまさずに養ひ」（『洪範談』p. 675）とされ、そのため「甚多」とされる。
- (注9) 『老子国字解』「重為根静為躁君」の青陵の解釈に「重き方は静にて、軽き方は動くなり。ゆへに躁し。躁はさわがしと訓ず」（『全集』p. 868）とあり、「静」と「躁」が対応する表現としてあげられている。この「躁」の解釈に従い訳した。また同じ箇所「君は重きもの也。尊きもの也。臣は軽きもの也。賤しきもの也」（同上）とあり、君臣関係がここでも比喻として用いられている。
- (注10) 「文殊」の（注11）を参照のこと。
- (注11) 「喜・怒・哀・楽するは気なり。甚喜・怒・哀・楽すれば、心どこへかゆきて気が心をうばふなり」（『洪範談』p. 661）。つまり民衆は感情を制御出来ないため、感情が発したときから、「心」が「気」に主導権を奪われてしまうことを指す。
- (注12) 不動経については「普賢」でも触れられており、また『天王談』において「鶴又上州辺に遊びたる時、不動明王の碑を立てる人ありて、文を鶴に頼みて書いてやりたる事あり」（『全集』p. 500）とある。青陵の述べるところから、不動経の文から青陵が知恵をみたことは見えるが、不動明王の絵図から何を得たのかは不明。不動経については、詳しくは後文

青陵自画賛訳注稿（坂本）

の「普賢」（注4）を参照のこと。観音については『天王談』（p.500）に、青陵が菩薩像から柔和の心で巨猛を制御する様をみてとったことが見える。

(注13) 『中庸』「君子之道、辟如行遠必自邇。辟如登高必自卑（君子の道は、辟へば遠きに行くに必ず邇きよりするが如く、辟へば高きに登るに必ず卑きよりするが如し）」とある。また『天王談』において「中庸にも卑近より高遠に登るとあるはこの事なり」（『全集』p.497）と述べている。

(注14) 青陵が越中加納村庄屋所有絵画の鑑定を依頼された際のこととして、「此秋尊は半眼なり。半睡を帯たる体なり。謝肇淪の文海披抄にも古人の語を引きて、柔らかき藤に座するほどの貴人は、精神すべからく半睡を帯ぶべしと云へり。是は謙しからぬ形容なり。心は動きやすきものなれば、ややともすれば進み出たがる。少しねむひと思ふときばかり心何れへも動かず。心しづまりてじつとしてをる。貴人の心しづまりてじつとしておれば、過ち出そこなひ無ふて宜しければ、須帯半睡と云へるなり。秋尊の心をうごかさずに心を丹田へをさめ玉へる処を画かんとて半眼にかく事なり」（『萬屋談』p.400）と述べており、ここから半睡云々は元は謝肇淪の文を引用したものであることがわかる。謝肇淪は中国明代の学者である。また『萬屋談』は『文海披抄』としているが、『文海披抄』が正しい書名であり、その名は『明史』藝文志に見える。「狨」はむくげ猿のことであり、皮を敷物に用いる。そのためここでも敷物の意で解釈した。『文海披抄』（北京図書館古籍珍本叢刊巻65所収 書目文献出版社 1988年）大臣徳量には「坐狨毛人精神須帯半睡」とあり、そこでは「坐狨毛」となっている。

三、普賢

普賢

知而信之者上智之資也。疑而問之者將知之也。不知而信之者下愚之病其不可醫乎。余一夕臨寫陳希三所描觀音文殊普賢像。某翁在側觀之半晌云。某不幸

自幼不讀書。凡天下之事。疑者過半。乃至如佛像則遂不可解焉。普賢何故騎象。象何故奉菩薩々々與象何故帶半睡。某不幸不讀書。故多不可解者。余云。子之不讀書大幸而已。非不幸也。讀書者特能知字而已。非能得其意者也。子之不讀書大幸而已。非不幸也。吾爲子誦不動經。子必其有覺寤。云是明王無其所居。但住衆生心想之中。翁俯而心求又半晌。拊掌云。善矣。然則佛像皆人心之圖乎。象是寫驕傲之心。菩薩是寫精神。皆不使氣勝心之意乎。余曰翁得之。海保皋鶴並謹題。

訓読

知りて之を信ずるは上智の資なり。疑いて之を問ふは將に之を知らんとするなり。知らずして之を信ずるは下愚の病にして、其れ醫すべからざらん。余一夕に陳希三の描く所の觀音文殊普賢像を臨寫す。某翁側らに在りて之を観ること半晌にして云ふ、某不幸にして幼きより書を讀まず。凡そ天下の事、疑う者半ばを過ぐ。乃ち佛像の如きに至りては則ち遂に解するべからず。普賢は何故象に騎るか。象は何故菩薩を奉ずるか。菩薩と象とは何故半睡を帯びるか。某不幸にして書を讀まず。故に多くは解すべからざる者なりと。余云ふ、子の書を讀まざるは大幸なるのみ。不幸に非ざるなり。書を讀む者は特だ能く字を知るのみ。能く其の意を得る者に非ざるなり。子の書を讀まざるは大幸なるのみ。不幸に非ざるなり。吾れ子の爲に不動經を誦す。子必ず其れ覺寤有らんと。云ふに、是の明王は其の居る所無し。但だ衆生心想の中に住すと。翁俯きて心求すること又半晌。掌を拊して云ふ、善きかな。然らば則ち佛像は皆人心の圖なるか。象は是れ驕傲の心を寫し、菩薩は是れ精神を寫し、皆氣をして心に勝たしめざるの意かと。余曰く、翁は之を得たりと。海保皋鶴並びに謹みて題す。

現代語訳

理解してこれを信ずるのは上智の元である。疑ってこれを尋ねることはこれを理解しようとすることである。理解もせずこれを信じることは下愚の悪い症状であり、しかも決して治すことは出来ない（注1）。私はある晩に陳希三の描いた觀音・文殊・普賢の画像を手本を側において書き写した（注2）。

ある老人が側で少しの間これを見ていて言うことには、「私は不幸にして幼少より書物を読むことがありませんでした。この世界のことで、疑問に思うものがほとんどです。そして仏像のようなものにいたっては遂に理解できませんでした。普賢菩薩はなぜ象に乗っているのか、象はなぜ菩薩を上をにただいでいるのか、菩薩と象とはなぜ半ば眠りを帯びた目をしているのか。私は不幸にして書物を読まず、そのため多くの物事について理解できないのです。」と。私はその老人に言った。「貴方が書物を読まなかったというのは大変素晴らしいことなのであって、不幸ではありません。書物を読むものはただ字を知っているというにすぎません。その書物に書かれている（天理である）意を理解出来ているということではないのです（注3）。私は貴方のために不動経を読みましょう。そうすれば貴方は必ずそこに含まれた意を悟り知ることができます。」（そして）言うことには「この明王には、自分の留まる所はなく、ただ生きとし生けるものの心の内に住まうものである。」と（老人にのべた）（注4）。すると老人は俯いて心の内でその言葉の意を求めていたが、またしばらくしてぼんと手を叩いて言った、「わかったぞ。そうであるならば仏像は全て人の心を表現した図であり、象というのは驕り高ぶる心を表し、菩薩というのは心を表したものか。全て（人心たる）気を（道心たる）心より上まわらないようにさせるという意味ですか。」と。私は「貴方は理解できましたね。」と。海保皋鶴並びに謹みて題す。

(注1) 『老子国字解』に「よふ知りて居る事にても、知らぬ心になりて、人にも問ひ、己れ心をも責るよふにするは、是上々の智也。知りもせいで知りたる顔なるは、大の病といふもの也」（『全集』p.942）とある。青陵は「合点のゆかぬ事を合点ゆきたる面をする事は、今以て鶴には出来ぬなり」（『天王談』p.512）と述べるように、合点のいかないものを合点のいかないまま受け入れるということを嫌っていた。

(注2) 陳希三は明代の画家陳賢のこと。希三・瞻葵・半禿僧・太玄道人等様々な落款・印章を用いている。詳しい個人伝記は不明。ただしその画は黄檗の渡来僧によって日本に招来され、日本で流行したと考えられている。陳賢については錦織亮介著『黄檗禅林の絵画』（中央公論美術出版 平成18年5月）第二章第二節「陳賢研究—作品と資料—」を参考にした。

(注3) 青陵はその書中でたびたび、書物を「読むこと」自体に囚われてしまっ

青陵自画賛訳注稿（坂本）

て、書に書かれてある本質である「意」である「天理」を理解するまでに至らないことを戒める。例として「すれば理を稽古するほど早き事なし。理と云ふものは書を読始めて会得するものに非ず。書をよまぬ方が反へて早きなり。如何となれば、書を読には彼注疏音義にかかりて、余程月日を費やさねば義理の論へゆかず。故に書を止めて生きたる世界をとらへて、ぎくぎくと推て見るほど早き事なし」（『天王談』p. 510）。このことから、ここで青陵が老人にむかって、「書物を読まないことは不幸ではない」と言うのは、書物を読むこと自体に囚われてしまうことがなかったことをむしろ幸いとするのだと解釈した。「意」と「天理」については「文殊」（注3）を参照のこと。

- (注4) 不動経とは修験道で用いられる仏説聖不動経のこと。青陵がここで老人に述べているのは、その中の「無相法身、虚空同体、無其住处、但住衆生、心想之中（無相の法身は虚空と同体なれば、其の住处無く、但だ衆生心想の中に住す）」（『修験聖典』醍醐寺三宝院内修験聖典編纂会編三密道書店 昭和43年5月）の部分だと思われる。